

國學院大學学術情報リポジトリ

東北伝承文学の研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 三田, 加奈, Mita, Kana メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002480

令和二年度 課程博士学位論文 要旨

要旨 東北伝承文学の研究

文学研究科文学専攻伝承文学

三 田 加 奈

令和二年度の課程博士学位論文「東北伝承文学の研究」の要旨については、以下のとおりである。

本博士論文の「東北伝承文学の研究」は、東北地方の「伝承文学」の本態を明らかにすることにある。比較的新しい学問分野である「伝承文学」は、福田晃らが最初に提唱した言葉であるが、一般庶民が日々の生活における屈託を癒すための娯楽文芸などの総称であり、そうしたものを対象にしたものと考えてよいだろう。口承文芸などの声の語りをはじめ、それを書写した二次的な文字資料（あるいは書承資料）、石碑、社寺縁起なども研究材料に含まれる。すなわち「伝承文学」は、構造的かつ継承という面から実態的に捉える必要があるだろう。

哲学者の鶴見俊輔が『限界芸術論』で、「構造的」について分かりやすく説明している。上位の芸術を「専門的芸術家」が「専門的享受者」を相手とする「純粹芸術」として、中位に「専門的芸術家」が「企業家」との合作し、大衆を享受者とする「大衆芸術」と、そして下位に「非専門的芸術家」による「非専門的」な享受者が楽しむ「限界芸術」といった三極構造を示した。伝承文学が対象とするのは、いうまでもなく「大衆芸術」から「限界芸術」の領域であろう。また「伝承文学」の継承については、そもそも支配者層のものである芸術を、被支配者層はこれを生活の立場から半ば習慣的に享受しており、そのような享受者と非専門的継承者は直接的に、また伝承の方法に基づいて自由に改変させながら、生活を基盤に再構築したものを享受し継承しているのである。このことは「伝承文学」の問題と深く関わっており、そうした伝承文学の方法や形態は、声から文字の領域にまたがるもので、具体的に語り物から昔話、伝説といった散文的な口頭伝承の形態のもの、それを管理し供給する側と、享受・愛好する側との双方向にもとづいて再構築したところのものを継承しているといえる。

「伝承文学」を理解するためには、変異の大きな要因となる地域性を考慮する必要がある。地域は生活の基盤であり、地理的、歴史的環境の変差が、伝承の形成、変容に大きなインパクトを与えていることは言うまでもない。人間の具体的な営みから生み出される地域の独自性が、伝承文学に彩りを添えている。

以上の伝承文学の特性を踏まえながら、本論文の中心となる問題について触れておく。「伝承文学」とは、声から文字にわたるものだが、言い換えれば生活と知識との相互通行で物語が生成している。一般の生活者が声から文字の世界における文学の素朴な感動を掬い取ったも

の、これは鶴見の言う「非専門的享受者」による「限界芸術」の解釈は、本論文における東北の地の伝承文学の世界を把握し、再認識する方法である。

柳田國男は「東北文学の研究」（『雪国の春』収録）の冒頭で、「文字以前の文学」あるいは「文字以外の文学」を「文字の新威力に拮抗して」花開かせたのが『義経記』だといい、その痕跡を辿って「標準文学」の狭さから脱却し、「東北文芸」のもつ意義を明らかにする必要があると述べた。柳田は『平家物語』と対比しながらも『義経記』は「読み本」の類いであり、目で文字を追う「見る」ものとは違い、読むという「語る」行為のもので、物語の流布に関わったのが座頭らの語り手であったとする。ただ、物語形成には熊野信仰を基盤とした地域の山伏修験が深く関与したことを明らかにし、物語に記される各地域の特性を挙げている。一方、その物語が成熟した背景には、「語り手の技芸と熱心」さ以外に、幾度となく物語を所望し語らせた地元の聴衆である「家を愛しまた祖先を思慕する」人々の存在をあげている。いわば語り手と聴き手との物語成立の実態をとらえている。義経主従が関わる個々の地域の語りを、語りの職にある者が都に持ち運び、「合資会社の如き持寄世帯」の形で参与、統一させたのが『義経記』であるとした。『義経記』にみられる各地の物語を、語りに関与する徒と聞き手との相互交流にもとづくダイナミックな生成ととらえた視点は、その後の語り物や伝説研究の先駆的役割を果たしたといえる。

ところで、柳田の「東北文学の研究」は『義経記』成長の時代から始まるが、その『義経記』は最も親しみやすい文学であったと同時に、一方で書承としては粗末に扱われてしまった物語であったと説いている。その原因は、各地で語られていた義経伝説を中央で継ぎ接ぎしたため、書承の受容は限定されたとする主張はよく理解できる。本来の物語が「直話体」であったので、そこには口承の期間における醸成が示されていたという。柳田は『義経記』の論考に続いて、書承として流布したとされる『清悦物語』を話題にしている。この物語は、義経主従の高館合戦から脱落した家臣・常陸坊海尊（＝清悦）を語り手とした「聞書」という体裁を取っている。最期を迎えた高館合戦の朝、近くの寺に出かけ主君を見捨てた常陸坊海尊の敵前逃亡の代償は、晒し者に匹敵するはずのものであったが、常陸坊海尊は清悦と改名し、挙句

に義経の最期およびその主従の動向をまことしやかに後世に語る役割を担って、語りの舞台に登場した。その経緯は『清悦物語』に逐一筆録されている。この物語は、その後の義経物等に少なからず影響を及ぼしている。『清悦物語』は書承の形で流布するが、その基盤には口承の多様な伝承が下地としてあった。

以上の柳田國男の先行研究を踏まえ、本論文の構成は、「口承の世界」と「書承の世界」に大きく二分し、四部立ての計十本の論考と、翻刻資料の二本を収めている。第一部「常陸坊海尊伝説の諸相」には「海尊、白石翁と「仙人の碁」「修験と儒者の海尊伝説」「変貌する海尊像」の三本を、第二部「仙台藩の語り物、昔話」には『正法寺開山記』と奥浄瑠璃「昔話「幽霊女房」と通幻」の二本、第三部「『清悦物語』の在地性」として「仙北次郎物語」の語り手」「高館合戦」における津波」「『清悦物語』と諸本」の三本、第四部「『鬼三太残齡記』の在地性」には「『鬼三太残齡記』と会津街道」「『鬼三太残齡記』の人物群」の二本を収めた。最後に、福島歴史資料館蔵本の『清悦物語』と国立国会図書館本の『駿河清重 伊達紙子笈捨松』の二本の翻刻資料を収録した。

以下、各論の要旨について簡単に説明していく。第一部は常陸坊海尊に関わる伝説を取り上げ、最初の「海尊、白石翁と「仙人の碁」」は、仙台藩白石領の阿子島家に寄寓する白石翁を話題にしたものである。阿子島一族は「摺上原の戦い」で伊達氏に敗れ、仙台藩白石領の傘下に入った。その阿子島家が、どのような経緯で名も知らない「白石翁」を匿うことになったのか不明だが、現存したであろう伝説的人物として今日も言い伝えられている。この「白石翁」については、仙台藩の儒学者・遊佐木斎や、仙台藩周辺の物語をまとめた書物『東藩野乗』が、老子や荘子の言葉を引いて賞賛している。道家思想のイメージを植え付けられた「白石翁」は、仙人的イメージに彩られる。それは、「常陸坊海尊」や「清悦」と同等あるいは同様の人物として描かれていることを示すものである。『東藩野乗』によると、「白石翁」は武田家の家臣「曲淵正左衛門」と将棋をしたとある。こうした長寿モチーフを白石翁伝説の残骸として記録しているが、中世末期の時代と合わない人物設定そのものが、謎の仙人的存在といえよう。長寿者と盤上モチーフ棋戦は昔話「仙人の碁」に通じるが、この話型を関敬吾は「浦島伝説」の重要なモチーフの一つである超自然的な時の経過のモチーフの「独立型」と解説しており、白石翁の超人的なイメージを植え付けた手法で

あったと考えられる。明治期の刊とみられる『鎌先温泉由来記』に「白石翁」のことを「常陸坊海尊」（ここでは霊神扱いだが）と記録されるのは、もともと白石翁が海尊という仙人的人物として評価されていたからに違いない。

続く「修験と儒者の海尊伝説」では、青森県下北半島の中央に位置する霊山の恐山を巡る参拝ルートに残されている海尊伝説を取り上げた。恐山から脇野沢、仏ヶ浦を辿る道筋に寄浪の海尊社があり、この浜の「子持ち石」を、死者供養の霊山巡りの際に拾って帰る風習がある。安産祈願を組み込んだこの海尊伝説には、この地域の修験の関与が伺えるが、それは八戸藩内の洋野町にある八坂神社の脇に置かれた「海尊の墓」にも、安産・子安信仰が付随しており、同様のものといえる。いずれも海尊伝説を背景に地域の人々に信仰され、そこには地域で活動する修験が関わっている。

ところで、恐山参拝ルートの寄浪とほぼ反対のルートで、津軽海峡に接する大畑町にも海尊伝説が残されていた。曹洞宗寺院の大安寺の門前あたりに海尊が出現していたというものである。門前の周辺には現在住吉神社があるが、かつてこの住吉神社の修験が信者を連れて黒森山に登拝していたという。住吉神社の代々の宮司家の墓は、大安寺の境内脇に今も残されている。この海尊伝説も修験との関わりが感得されるが、その考察の手掛かりに近接する大安寺とその開山である和尚の一東異寅の伝説を追った。一東和尚の経歴を辿ると、彼自身が修験と深く関わっていることが見えてくる。晩年には故郷の宮古や山田の豊間根にて地域の人々の安寧を祈願して「土中入定」したと言い伝えられる。三陸海岸から下北半島に至る海岸沿いには点々と海尊の足跡をたどることができるのは、「義経北行伝説」との関連があるからであろうか。アンバ信仰に海尊が関わるのも、海岸伝いを信仰の普及に務めてきた修験の活動の反映といえよう。このような修験による海尊伝説の口碑について仙台藩儒医の相原友直は批判的であるが、盛岡藩の儒学者・高橋子績は海尊を仙人ととらえている。儒学者間で、それぞれの立場で見方が異なるのは興味深い。

「変貌する海尊像」は、黄表紙の『駿河清重 伊達紙子笈捨松』に描かれた海尊像を追ったもので、信仰を伴ったこれまでの海尊像とは異なる。林羅山が海尊を「残夢仙人」と称したが、それが江戸の文芸世界で表舞台に現れると、イメージを大きく変貌させた人物として登場し

てくる。端的に言えば、妖異・怪力を操る怪異的な存在として描かれている。その走りとなるのが、江戸の中期に実際にあったとされる百姓娘の仇討ち事件、すなわち「奥州白石噺」を取り込んだのが実録体小説の『慶安太平記』であるが、そこにも海尊すなわち清悦は登場し、逆賊となる由井正雪を批判して面会を拒絶している。黄表紙に描かれる海尊も、義経主従の面影を残しながらも、むしろ諸悪を懲らしめる呪術師として、庶民の味方のスーパーヒーローに変身している。江戸の悪所である芝居等で造型される海尊は、抑圧される都市民の願望を担った人物として、東北の修験が残した仙人像とは大きくかけ離れているものの、「仙人」という共通性では一致している。

第一部の多くは宗教者の関わる伝説であるが、それに対し第二部は一般庶民が娯楽として享受してきた生活に密着したものを取り上げた。東北の曹洞宗本山と謳われた奥州市水沢区の正法寺に関わる語り物を取り上げたのが『正法寺開山記』と奥浄瑠璃である。正法寺の門前に、「ヒタチカイドウに曲げられた」という「鼻曲がり地蔵」の海尊伝説が残されているが、これは前述した下北半島の大安寺の門前に屯していたという海尊伝説を思わせるものである。正法寺を開山した無底和尚の出生由来を描いた『正法寺開山記』は、いわゆる曹洞宗通幻派が喧伝する祖師通幻の出生由来に関わる物語である。正法寺開山とされる無底和尚と弟子の通幻とが入れ替わったり、重なったりして伝承されているところに、地域の特性がうかがえる。この『正法寺開山記』は、江戸時代、仙台藩を中心として盛んであった奥浄瑠璃の一端である。六段仕立ての物語構成は、明らかに奥浄瑠璃を目ざしていたようだが、語られようとした頃には舞台が廃れてしまい、口演はされることがなかった。宗教と娯楽を兼ねた物語構想は、伊勢参りを取り入れながら、死と生の世界に引き離された男女が、その垣根を越えて結ばれるという「死後結婚」の習俗を取り込んだものである。

一方、これを昔話化したのが「幽霊女房」である。「昔話「幽霊女房」と通幻」では、曹洞寺院の布教に用いられた物語が民間に降って昔話として広く伝承されているのは、語り物よりも昔話の裾野や享受層が広いことを示しているといえる。縁起や奥浄瑠璃、伝説や昔話などを娯楽にして、日常を営む人々の生活の一端がこうした物語からも伺われる。

本論文の後半においた「書承の世界」は、声の文芸に対し、文字文芸の世界である。両者は実際の受容の現場で整然と分かれるわけではな

いものの、文字資料として残っているものを主に扱うことから、ここでは便宜上二つに区分した。

第三部は、写本『清悦物語』が、地域の中でどのように生成、享受されてきたかを論じたものである。義経のありし出来事などを清悦という長寿者が身近な人に語り聞かせるもので、三つの論考からなる。

写本の『清悦物語』は、「清悦長寿物語」「高館合戦物語」「仙北次郎物語」の三つの内容から構成されるが、まず「仙北次郎物語」の語り手」として、三番目の内容から取り上げた。この挿話の特徴は、当時の世間話を取り込まれていることにあるだろう。語り手は、物語の信ぴょう性の疑義を、『吾妻鑑』の文治五年の記事を虚構仕立てにして取り込んでいる。その疑義とは、秋田城之助の一族の系統のことである。語り手の批判を読みほどこいていくと、実は秋田実季のことを指していることが明らかになる。晩年、秋田実季は西国の小浜に隠居するが、八百比丘尼伝説が伝わる小浜に羽賀寺という秋田氏の所縁の寺院があり、その縁起や書状から、秋田実季による秋田氏の本姓や系図へこだわり、そして「仙北」の「常陸房」とのつながりが見えてくる。また、書写とかかわる語り手の周辺の苦渋が伺えるし、写本の時代もある程度特定できる。

「高館合戦物語」と津波」は、平泉における義経最期の「高館合戦」の舞台について分析し、考察を加えた。合戦中に「二度の津波」が押し寄せるといふ記述は、語り手による虚構ではなく、実際の自然災害に基づいたものと想定した。秋田実季の時代と照合して考えると、起こったのは慶長年間の津波のことであろう。物語にみえる津波は、平泉の高館が舞台となったものではなく、仙台藩南部の名取にある「高館」周辺の災害語りとであろうと推察した。義経の物語に準えて津波を取り込んでいる背景には、名取高館にいた語りの集団の存在がうかがえる。未曾有の災害を、このような形で記録に残すという、地域事情がかかわっていたといえる。その理由に、仙台藩による正史の津波記録が極端に少ないこと、名取の高館は熊野学頭の拠点であったこと、その周辺に奥州藤原氏に関わる伝説が散見されること、そして『清悦物語』そのものは、村田の御曹司（伊達宗高）の小姓が筆録した物語であることなどからである。物語は、平泉の高館合戦を語りつつも、それはパターン化された語りであって、実質的に平泉のことを描いた場面は少ない。名取の場合、地理的に海からの津波が高館の麓まで川を遡上して

くることは十分あり得るので、平泉の高館の津波のことと特定するのはまず無理があるといえよう。

『清悦物語』と諸本』は、現存する『清悦物語』の諸本を整理・分類し、系統立てて、その全体像を明らかにしようとしたものである。写本の多くは太平洋側の南部藩および仙台藩を中心に残されている。その内容が奥浄瑠璃風の見出しや高館合戦の語りに主軸を置いていることなどから、この地域の語りに関わる勢力が写本の書承に寄与したといえる。ただ、海尊伝説を取り込むなど、その根底には口承のもともとの語りの存在があったと考えられる。

第四部の『鬼三太残齡記』の在地性』は、柳田國男が『清悦物語』の一異本として低評価した『鬼三太残齡記』のことについて取り上げた。柳田の説く、先行する文芸に価値を置こうとする姿勢は一面的であり、性急なまとめ方である。柳田の異本という論を批判するために、『鬼三太残齡記』を『清悦物語』と内容比較をして整理した。そこから、作品がどのようにして地域の人びとに受け入れられ、地域の実情がどのように盛り込まれているのかの関心を中心にして、地理・歴史的研究法により実証を試みた。

『鬼三太残齡記』と会津街道』では、『清悦物語』と一致しなかった独自の物語に注目した。義経一行の北国落ちがそれである。『義経記』にみられる逃亡ルートとは異なり、越後から会津を抜けて平泉に到るというもので、そこに重きを置いた考察である。越後から会津への街道は、慶長年間の地震によってルートが変更となったが、『鬼三太残齡記』は災害後のルートを通ったことが確認できる。会津坂下の地を抜け、福島で佐藤兄弟の血縁との関係にも触れる。最上の地ではなく会津を選択した理由には、地域の事情が関係している。

『鬼三太残齡記』の人物群』では、和泉ヶ城落城時とそれにつづく高館落城時にスポットを当てて考察している。和泉ヶ城の城主である和泉三郎忠衡は、義経に味方した藤原氏として後世さまざまに英雄化されていくが、『鬼三太残齡記』における忠衡もその流れに従っている。『鬼三太残齡記』にみえる忠衡を取り巻く人物群を追ってみると、仙台藩主の一族の事情と関わっていることがわかる。一方、高館合戦では、杉目行信という身代わりを置いて義経が生きのびたという展開をとっている。特に義経の「蝦夷地渡航」を匂わせるのは、平泉を中心とした藤原氏、あるいは秀衡崇敬の意識が反映したものととらえられ、物語が在地の事情を汲み取り形成されていることが確認できる。いずれも

『鬼三太残齡記』の独自モチーフであり、『清悦物語』が意図しているものとは明らかに相反している。

以上、東北の伝承文学の本態を明らかにするために、先行する柳田國男の「東北文学の研究」を受け継ぎながら、一方では批判的に実証して、新たな視点を加えてきた。常陸坊海尊伝説に焦点をあてて口承および書承にわたって取り上げたが、民間の文芸がそこに暮らす人々の生活や生き方と深く関わっている様子を示すことができた。また一般庶民のニーズに合わせて作品が形成され、その語りを享受する人々に提供するための語り手がいて、伝承文学が成立していることがダイレクトに確認できた。文芸と地域の関わりの実態を本博士論文では究明できたと考えている。